冷やし続けると氷になる。ロバの荷を1オンスずつ増やしていくと、ロバは担いきれない重荷のために倒れてしまう。こうした例え話を空論的な無駄話と言う人があれば、それは大きな間違いである。なぜなら、それを知ることが実践において非常に重要な意義を持つからである」

私は英語学習はスプーンでバスタブに水を溜めるような行為だと考えている。スプーン一杯の水はわずかであり、バスタブの容量からすれば、感覚的にはゼロに等しい。そうであっても、水を入れ続けなければ満杯にはならない。だが、いつ満杯になるかは誰にもわからない。しぶとく諦めずに水を入れ続けなければならない。いずれ満杯になるのだが、たいていの人は水が溢れ出す前のどこかでの地点で投げ出してしまう。

英会話はプラクティスの問題

Repetition is the mother of skill.という言葉がある。英会話もスキルである以上、上達のカギは練習にある。日本は英語が話せなくても何不自由なく暮らせる恵まれた国である。だが、裏を返せば、日常的に英語を話す環境を意図的に作らなければ、その習得は難しい。一にも二にも練習なのだ。

『レアジョブ』のオンライン英会話レッスンを受け始めて8年目になる。毎日25分、ニュース記事を題材に英語で話すことを続けてきた。コロナに感染して14日間休んだことはあるが、補助チケットを使って欠席分をカバーしたため、実質的には無欠席を続けている。継続の秘訣は、「例外を作らない」ことに尽きる。

ニュース記事の精読やシャドーイング、予想されるディスカッションの準備に取り組み、レッスン時間を含めると毎日2時間を英会話の練習に費やしている。どんな分野でも1万時間の練習でプロの域に達すると言われている。このペースを続ければ、あと6年ほどで英会話もネイティブ並みになるはずだ。

悪手を打ち続ける文科省

『英文標準問題精講』(原仙作著・旺文社)という大学受験の参考書がある。世界の文豪や思想家の英文が220編収録されている。読解力を鍛えるには十分な内容である。1933年の刊行以来、累計発行部数は1,000万部に達し、一世を風靡した名著である。今も書店の受験コーナーでは平積みになっている。

塾ではこの「英標」をテキストにしている。塾生は、「英標」の難解な文章を正確に読みこなすのに悪戦苦闘している。私は、その英文を隅々まで熟知している。特に前半の100編はほぼ暗唱できるほどだ。「英標」の暗記は、私自身の英会話の内容に厚みを加えてくれている。

「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能のうち、「読む」ことこそが英語習得のベースにある。そうであるにもかかわらず、文科省は「英会話重視」「文法軽視」の悪手を打ち続ける。高校生の「読解力」の低下は目をおおいたくなるほどである。

今や、この名著を読み通せる人は、高校教師でさえも絶滅危惧種のような存在になっている。中学・高校・大学と10年もの間、英語を学んでいるにもかかわらず、原書をまともに読めないとは、どのような英語教育なのか。スピーキングに偏重した文科省の愚策によって、我々は教養を身につける技能すら奪われてしまった可能性がある。

「英文を正確に読みたい」という人は多い。文法書を読むだけでは、英文は読めるようにはならない。文法書と英文を結びつける橋渡しが要る。現在、通信教育も行っている。2時間の授業を録音した音声ファイルを、通塾できない県外の受講生に配信している。英語教員や一般社会人がこの通信講座で学んでいる。

「英語難民」の救済

我が身を振り返ると、さまざまな場面で、さまざまな人から受けてきた、さまざまな恩義を思い出す。同時に、数えきれないほど多くの人々にかけてきた迷惑や、不義理、不誠実も記憶に蘇ってくる。

大学時代はボート部で汗を流した。郷里にUターンした後も、毎日ジムに通っている。幸いなことに、気力、体力、知力はまだ健在である。英語習得に苦しむ「英語難民」を一人でも多く救済することが、私の英語教師としてのミッションである。